

## 第7章

### 対青葉再試合決定

苦しみながらも勝ち進んだ地区予選での決勝戦で11対10で青葉学院に敗れ、準優勝におわつた墨谷二中だったが、相手の青葉学院が決勝戦で14人をこえる選手を使って試合したのがルール違反とわかり、決勝戦の再試合が決定した。墨谷二中のキャプテンで四番を打ちサードを守る谷口が連盟会長によれば30日後にあらためて地区優勝を決める試合をおこなうことをつけられた。谷口はさっそくナインにそのことを伝えた。

#### 7・1 野球部の部室の中で

谷口が部員にきょうのことを話している。誰もがおどろいた顔をしている…

丸井「ほ、ほんとですか？」

谷口「30日後だ！」

丸井「ようし、谷口さんら三年生がいることだしメッタンメッタンのクッチャンクッチャンにしてやるっぜ。」

島田「おうよ。」

次の日の練習では引退まじかだった三年生をふくめて、新たな目標に向かって練習する墨谷ナインの姿があった。その中で一人、一年生でピッチャーをつとめるイガラシはややおもくるしい気持ちで練習していた。

#### 7・2 練習後、学校からの帰り道で

谷口「イガラシどうしたんだ、今日は元気がなかったじゃないか。」  
イガラシ「ほ、ぼく青葉学院をあいてに九回も投げるとおもうと……ちよつと、たしかに地区予選では一回をおさえましたけど……正直いつてあれだけの打線じゃ三、四回が精いっぱいですよ。」

地区予選では三年生の松下が八回まで投げていたが、相手の打球を肩にうけケガをしてしまった。イガラシは九回の一回を投げただけだった。

谷口「それもそつだな。しかしバックがしっかりしてきていることだし、打たせていけばいいじゃないか！」

島田「そつだよ、おれたちにまかせとけつてんだ。」

加藤「弱ねをはくなんてイガラシらしくないぞ！」

イガラシ「すみません。」

谷口「じゃあな。」

丸井「さいならー。」

島田「またな。」



## 7・3 練習前の野球部部室で

写真部「われわれ写真部の者ですが、校長にたのまれてこれを…」

丸井「なんスかそれ?」

写真部「青葉の特訓のようすをビデオにとってきたんです。」

谷口「青葉の特訓! それはありがたい、さっそくみせてもらいたいな。」

そこには青葉学院の卒業生までもが参加しての猛特訓の練習があった。ピッチャーをイガラシにみだてての練習、部長みずからがノックをしての守備練習、相手のエースの変化球練習……墨谷中部員はそれを見ておどろき、圧倒されてしまった。

谷口「どうもありがとう。」

写真部「い、いえ、どういたしまして。」

谷口「さあ、みんなどうしたんだ、練習だ! 練習!」

部員「……」

谷口「くよくよしたってはじまらないぞ、青葉に負けなように練習すればいいじゃないか!」

部員「はい。」

青葉のビデオの練習があまりにもすごかったので、練習していてもみんな元気がない。ピッチャーのイガラシは投球練習をしているが、気持ちばかりがあせて球にいきおいがいい。守備練習のノック役を丸井に変わってもらい谷口がイガラシの投球練習のようすを見に行った。

谷口「イガラシ、もっと肩の力をぬいてみる。」

イガラシ「どうですか?」

谷口「だいぶよくなったぞ、でもまだまだ肩に力はいっているぞ。」

イガラシ「はい。」

谷口「そうだイガラシちょっとみてくれないか。おまえが三、四回しか投げられないっていうから、あれからちょっと練習してみただ。」

谷口の投げたボールはやや山なりのボールだった。球にはあまりスピードがなくキャッチャーもあきれた顔をしてボールを投げかえた。イガラシもすこしとまどいを感じていた。

谷口「どうだ、どこがわるいかなあ。」

イガラシ「も、もう一度、投げてもらえませんか?」

谷口「どうだ?」

イガラシ「もっとバックスイングで腕をおおきくのばして投げたほうが、いいんじゃないですか。」

谷口「どうか?」

イガラシ「いいんじゃないんですか。」

谷口「なるほど、バックスイングねエ……」

腕をのばして、おおきくふる。谷口はイガラシが言ったことをつぶやきながら投球練習をした。腕をのばして、おおきくふる。

谷口はイガラシがアンダーシャツをきがえに部室にいったあとも投球練習をつづけた。腕をのばして、おおきくふる。

イガラシ「まったく、あんな投球で青葉につつよつすると思ってるのかな、なんにもわかっていないんだから。」

イガラシは一人部室の中でつぶやいた。

## 7・4 谷口の家で

腕をのばして、おおきくふる。自分の部屋で投球練習をしている谷口の姿があった。足をおろすたびにたたみがミシ、ミシと音をたてている。

母「またはじめたよ。」  
父「キャプテンとしてなんとかしようってのはわかるが、一週間たらずじゃなあ……」

そのあいだにもミシ、ミシと音が聞こえてくる。

谷口「ちよつと神社にいってくるね。」

神社ではかべにむかって投球練習をする谷口の姿があった。

腕をのばして、おおきくふる。  
だんだんわかってきたぞ！  
腕をのばして、おおきくふる。  
そうだこんなかんじだ！  
腕をのばして、おおきくふる。  
谷口はすこしのひまもおしんでピッチングの練習にはげんだ。



## 7・5 試合まであと一週間とせまった練習中

練習中にこの前の新聞記者がたずねてきた。もちろんこんどの地区優勝をかけた試合の取材にきたのであった。

新聞記者「どつかね調子は？」  
丸井「まあまあです。」  
新聞記者「あそこで投げているのはキャプテンの谷口くんじゃないのかな？ ピッチャーもやるのかな？」  
丸井「と、と、とんでもない、ただのあそびですよー。」  
新聞記者「よゆうがあるんだなあ、試合まであと一週間だっというのに、そんな状態じゃないはずだが……」  
丸井「……」

## 7・6 練習が終わったあと部室の前で

谷口が投球板に向かって投げ続ける音が聞こえている。「コーン」「コーン」「コーン」……

島田「まったくいつまでつづける気なんだ……」  
イガラシ「よしなさいよ。」  
島田「そ、そりゃ、キャプテンの努力はかうよ、しかしやってやれないことと、やれることがあることをしるべきだよ。」  
加藤「まったく、試合まで一週間しかないってのによ……」  
丸井「イガラシは陰でコンコンいつなっというてんだー！」  
加藤「そういつおまえだっって新聞記者にきかれてこまっていたじゃないか。」  
丸井「そりゃ、そりゃおれだっこの下タン場までな、キャプテンのやっっていることはずせないさ。でも女子学校中のわらわを者にされてそのうえおれたすナインが陰でコンコンいやみをいって、キャプテンがかわいそりで……」

部員が話をしている間も谷口の投げ続ける音が聞こえてくる。「コーン…」「コーン…」「コーン…」

丸井「イガラシ！ キャプテンにあきらめるようにいつてこいよ！ おまえピッチャーなんだし、だいいちおまえが最初にはつきりいつときゃこんなことにならなかつたんだ。それに……」

イガラシは丸井をずっと見ている。

丸井「な、なんだよ。」

イガラシ「おれにはいえませんよ。」

丸井「な、なんだよ。」

イガラシ「だいたいおれがそんなことをいえるがらかい、三、四回しか投げられないなんて弱ねをはきやがってよ、おまけに青葉の特訓のビデオをみたぐらいでオタオタしやがって、ところがどうだいキャプテンは、やるのがなんであらうとあきらめやしない！ 最後まですてやしないじゃないか！」

部員「……」

イガラシ「最後まであきらめないああいう態度はだいいじなんじゃないですか。」

部員「……」

丸井「みならわなくっちゃな……」

さらに墨谷の猛特訓はつづいた。すこしの時間もおしんで練習にはげんだ。谷口一人だけの昼休みの練習にも、部員全員が参加していた。ナインのひとりひとりがあきらめまい、試合をすてまいという態度にかわっていた。

松下「だけど谷口さんてふしぎな人だ…たとえやるのがなんであるうと、また

みんなをひっぱりあげてしまった。ふしぎな人だ…」

ケガをしてこんどの試合には出場することできない松下が練習のよつすをみてつばやいた。谷口はあいかわらずひまさえあればボールをほつっていた。

「コーン！」

谷口「だいぶおもったところへ投げられるようになったぞ。しかしこれじゃまだ打たせてとるタマだ！」

「コーン！」

イガラシが谷口の投球練習をしているそばにやってきた。

「コーン！」

何かにおどろいたよつすである…

「コーン！」

そんなイガラシに丸井がきがついた。

丸井「どつしたんだよ、イガラシ？」

「コーン！」

イガラシは谷口の投げるタマにおどろいたのである。谷口が投球板に投げたタマが谷口のあしもとにまではねかえってくるのであった。

イガラシ「どつやらセットポジションもおほえてもらったほつがよさそつだな。」

「コーン！」

部員全員谷口のもとにあつまってきた。だれもが谷口の投げるボールにおどろいた…。そして決勝戦の再試合の日がやってきた。